

## 研究主題

「道徳的価値を自分のこととして捉え、自己の生き方についての考えを深める児童の育成  
— 一人1台の学習者用端末を活用して考えを可視化し、フィードバックする指導の工夫 —

東京都教職員研修センター研修部教育開発課  
港区立本村小学校 主幹教諭 中西 宏

## 第1 研究のねらい

「道徳の時間」は、平成27年の学校教育法施行規則の一部改正により、「特別の教科 道徳（以下、道徳科）」として位置付けられた。そして、同年4月から先行実施がなされ、小学校では、平成30年度から現行の学習指導要領の全面实施となっている。

令和3年度道徳教育状況調査（文部科学省 令和4年3月）によると、「道徳科の授業を実施する上での課題」について尋ねたところ、小学校の回答割合の上位5項目は、「話合いや議論などを通じて、考えを深めるための指導」63.8%、「道徳的価値の理解を自分との関わりで深めるための指導」56.9%、「物事を多面的・多角的に考えるための指導」55.8%、「教材の吟味や授業構想のための時間確保」51.0%、「道徳科の特質を踏まえたICTの活用」47.1%であった。

また、「GIGAスクール構想の実現へ 一人1台端末は令和の学びの「スタンダード」」（文部科学省 令和2年6月）では、「これまでの我が国の教育実践と最先端のICTのベストミックスを図ることにより、教師、児童・生徒の力を最大限に引き出す。」と示されている。特別の教科 道徳においても、道徳科の特質や学習指導過程を生かして、学習ツールの一つとしてICTを積極的に活用し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげることが重要であると示されている。

さらに、これまでの道徳科の指導の経験から、道徳科の教科化に伴い、教員の意識向上が見られ、話合いや議論する道徳を進めているものの、児童自身との関わりで考えを深める指導や多面的・多角的に考える指導について、課題があると考えていた。

そこで、道徳的価値を自分のこととして捉え、自己の生き方についての考えを深める児童を育成するために、指導方法の工夫を考え、研究主題を設定した。

## 第2 研究仮説

自分との関わりで考えたことを話合いや議論を通して考えを深めるために、以下の仮説を考えた。

児童が、道徳的諸価値を自分との関わりで考え、一人1台の学習者用端末を活用した話合いによって、相互に考えを共有し、議論することができれば、児童は、自己の生き方についての考えを深めることができるだろう。

## 第3 研究の内容と方法

### 1 基礎研究

(1) 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編との関連の整理

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編では、指導の基本方針（1）に、「道徳科の特質を理解する」ことが示されている。また、道徳科の特質を生かした学習指導として、道徳科の特質を十分考慮しつつ、学習指導過程や指導方法の工夫の大切さや児童が自

らのよさや成長を実感できるように工夫する重要性が示されている。

## (2) G I G Aスクール構想の下での小学校特別の教科道徳の指導についての整理

「G I G Aスクール構想のもとでの小学校特別の教科道徳の指導について」（文部科学省令和3年6月）では、道徳科の特質を生かした学習を効果的に行うためには、I C Tを、自分の考えをもったり、他者の考えを知ったりする手段として活用することが考えられることが示されている。

## 2 調査研究

### (1) 目的

道徳科の学習における「自分のこととして道徳の授業で考えているか」、「道徳の授業における一人1台の学習者用端末の活用」に関する意識調査を行い、調査結果を分析して、課題を抽出し、指導の充実を図るために行った。

### (2) 調査方法

都内公立小学校の指導者及び第4学年児童対象に、令和4年7月に実施した。

### (3) 調査結果

児童や指導者へのヒアリングとアンケート調査では、児童が道徳的価値を自分のこととして考えることや教材の登場人物の心情に共感して考えること、また、児童や指導者が考えを共有することなどに課題があることが分かった。

## 3 開発研究

以上のことから授業モデルを開発した。（図1）授業モデルは、自己の生き方についての考えを深める学習を効果的に行うことができるよう、下の4点の指導の工夫とともに、一人1台の学習者用端末（以下、端末）の活用を学習指導過程に位置付けた。端末は主に情報共有、話合い、フィードバックの工夫で活用する。指導者は想定に基づいた意図的な指名を行うために、情報共有の際に全

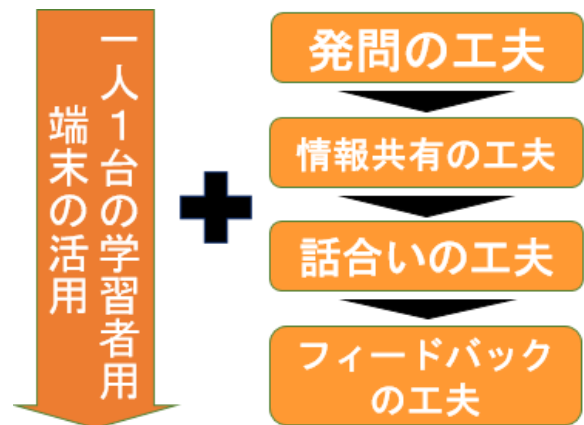


図1 授業モデル

児童の考えを閲覧する。これによりねらいに迫った話合いが活発に行われると考えられる。話合いを深め、児童を価値付けるためには、情報共有に十分な時間確保が必要になる。そこで発問を工夫し、自分のこととして考えとともに時間を確保できるようにした。

- (1) 発問の工夫：授業における中心発問の場面の状況のような生活経験を導入時に発問する。
- (2) 情報共有の工夫：端末の協働学習アプリを活用して、児童が互いの考えを共有したり、指導者が児童の考えを把握したりする。
- (3) 話合いの工夫：意図的な指名の計画を立て、話合い活動を通して児童の考えが徐々に深まるようにする。端末を活用することで、互いの考えを共有しながら、ねらいに迫った話合いを行う。
- (4) フィードバックの工夫：児童の予想される反応に対して、教師が適切に認め・励ますことができるよう、児童に応じた言葉掛けを考える。

開発研究は、これらの指導の工夫の有効性を検証授業で明らかにし、研究主題に迫ることを

目指した。

#### 4 検証授業

都内公立小学校第4学年児童32人を対象に、道徳科の授業を、令和4年9月30日から10月28日までの期間に実施した。ここではその中から10月28日に実施した授業を報告する。

(1) 検証授業の様子（主題名 信頼のきずな（B 友情、信頼）教材名「絵葉書と切手」）

検証授業を行ったところ、次のような児童の様子が見られた。（表1）

表1 指導の工夫と児童の様子

指導の工夫	児童の様子
発問の工夫 児童が、登場人物に自我関与して考えやすくするために、授業における中心発問の場面の状況のような生活経験を導入時に発問した。	導入で「友達がよくないことをしていた時に「だめだよ。」と言えなかった。」と、自己の経験と重ねて課題意識をもった。授業の振り返りでは「言ったら私が嫌われてしまうかもしれない。でもあい子さんが嫌われるより自分が言ったほうがよい。」と、共感して考えることができた。
情報共有の工夫 児童相互の積極的な学び合いと指導者による意図的な指名を行う事を目的とし、端末の協働学習アプリの情報共有機能の活用を計画した。	児童が相互に考えを閲覧し、自分の考えとの相違点を比べながら見たり、授業チャット機能等を活用して、他の児童の考えに対してコメントを残したりすることで、多くの児童が互いの考えを共有する様子が見られた。
話合いの工夫 児童の発言を通して、ねらいとする道徳的価値について考えが深まるように、意図的に指名の順番を計画し話合いを行った。また、児童の考えを整理した板書を通して話合いを行った。	児童のこれまでの「友情、信頼」に係る学習状況を踏まえ、友達のよさ、友達を受け入れることの大切さ、信頼することの難しさの順に指名したことで、児童は信頼することの難しさについて考えを深める様子が見られた。児童から出された意見を「3つの立場」に整理して板書したことで、児童は、視覚的に様々な考えを捉えることができた。
フィードバックの工夫 発言した児童の考えを深めたり、学級全体に広げたりするために、児童の発言やつぶやきといった反応に対して、指導者が適切に認め・励ましの言葉掛けを意図的に行うようにした。	「友達だからこそ料金不足を言うことにしたと思います。」と発言した児童に「他の子は、「友達だから言えない。」と言っているけど、どう違うのでしょうか。」と問い返した。児童は、「信頼している友達だからこそ言うのだと思います。」と発言した。

(2) 授業の様子と児童の変容についての考察

##### ア 発問の工夫

発問の工夫により、導入から振り返りの発問まで、児童は一貫して登場人物に自我関与して考えていた。

##### イ 情報共有の工夫

児童相互の端末を活用した積極的な学び合いから、児童は、自分と友達の考えを比べ、さらに自分の考えを深めることができた。端末は自分の考えを示すとともに、友達の考えを知り、比較して話し合いながら、自分の考えをより確かなものにすることに有効だと考える。

##### ウ 話合いの工夫

端末の活用により自分の考えを明確にした内容項目の指導の要点を踏まえた話合いは、自己の生き方の考えを深めることに効果的であった。また、端末を活用した意図的な指名の順番を計画し、それに基づき話合いを行うことで、児童同士で考えを深め合う姿が見られた。

##### エ フィードバックの工夫

児童の考えを深めたり広げたりするために、指導者が児童の発言を適切に認め、励ます言葉掛けは効果的であった。指導者のフィードバック後に、児童が授業チャット機能を活用し、児童同士が互いの考えを認め合っていたことから、児童同士が効果的に活用してよりよい生き方について考える姿が見られた。

(3) 観察対象児の学習状況

質問紙調査や担任への聞き取りを基に、指導の工夫による傾向の異なる成果が表れた3人の児童を抽出し、分析した。（表2）

表2 観察対象児の授業の様子と変容

	検証授業序盤の発言・記述	検証授業終盤の発言・記述	観察対象児の変容
A	友達がいけないことをしたときに、「だめだよ。」と言えなかった。関係が悪くなるのが怖かった。	だめなことはちゃんとと言った方がいい。友達が同じことを繰り返してしまう。	友達との関係を気にする発言から、互いに助け合う、友情の大切さに気付いた。
B	「せっかく書いて送ったのに。」と、あい子をいらだたせてしまう。間違えたことを知った愛子との友達関係が崩れると思った。	友達だからこそ間違えたことをしていたら、「だめだ。」ということを手直に伝えた方がいいと思った。	友達との関係を気にする発言から、互いに高め合う友情に気付いた。
C	「料金のことなんてどうでもいいじゃない。」と思われて「友達じゃなくなってしまう。」と考えた。	D児の「友達だからこそ言うことにしたと思います。」の発言を聞き、信頼は大切だと考えた。	友達の発言を通して、信頼関係があるからこそ、友達に伝えることが大切だと気付いた。

観察対象児の学習の様子より、3人ともに、道徳的価値を自分との関わりで考え、自己の生き方についての考えを深めることができたと考えられる。

## 第4 研究の成果

### 1 成果

今回取り入れた指導の工夫とともに、端末の活用を学習指導過程に位置付けることで、以下の3点のように、相乗的に児童の自己の生き方についての考えを深める学習につなげることができた。

- 授業における中心発問の場面の状況のような生活経験を導入時に発問をしたことで、児童は、本時のねらいとする道徳的価値を自分のこととして考えることができた。これは端末の協働学習アプリを活用する話し合いによって、ねらいに迫った学びの深まりにつながった。
- 端末の協働学習アプリを活用して話し合い、他の児童の考えに対してコメントを残したり自分の考えを広げたりすることは学級全体での話し合いを活発にすることにつながった。
- 協働学習アプリの情報共有機能を使って、指導者が児童全員の考えを把握することは、話し合いを円滑に行い、指導やフィードバックに生かすことができた。

### 2 研究成果物

これらの成果を生かして、本研究を通して開発した授業モデルを基に、「道徳科授業づくりチェックシート」を開発した。(図2) これは、指導者が作成した学習指導案をもとにセルフ

チェックし、授業づくりの準備をするためのシートとして開発した。なお、A3見開き右側にはチェックシートを確認できるよう、授業モデルを掲載した。

## 第5 今後の課題

他の学年や内容項目でも活用しやすいものとなるよう、他の学年の学習指導案を作成し、検証を重ね、授業モデルの改善を図る。

図2 道徳科授業づくりチェックシート